

リンゴ斑点落葉病は早期からの防除を！

今年にはリンゴ斑点落葉病の発生が早くから見られ、6月上旬の発生ほ場率は、多発生だった前年を上回っています（表1、2）。

本病は、高温多雨（最低気温20℃以上で3日以上連続降雨）で多発しますが、今後の気象1か月予報では、気温は高い予想となっており、降雨が続く場合には発生増加が心配されます。

ほ場内の発生状況を十分に把握し、予防を基本とした適切な防除に努めましょう。

表1 6月上旬におけるリンゴ斑点落葉病の発生状況（定点ほ場（宇都宮市・矢板市））

	平年値 〔2013～2022年〕 平均値	令和3（2021）年	令和4（2022）年	令和5（2023）年
発生ほ場率（%）	5.7	0.0	57.1	71.4
発生葉率（%）	0.0	0.0	0.3	0.2

表2 7月上旬におけるリンゴ斑点落葉病の発生状況（定点ほ場（宇都宮市・矢板市））

	平年値 〔2012～2021年〕 平均値	令和3（2021）年	令和4（2022）年
発生ほ場率（%）	16.9	66.7	85.7
発生葉率（%）	0.1	0.8	0.3

1 病原の生態と被害

リンゴ斑点落葉病の病原は糸状菌の一種 *Alternaria mali* であり、被害落葉、皮目、鱗片などで菌糸の形で越冬し、春に分生子（胞子の一種）を形成し一次伝染源となる。病斑上では分生子を盛んに形成し、秋まで二次伝染を繰り返す。

葉の病斑は、はじめ2～3mmの褐色または暗褐色の円形病斑（図1）で、病徴が進展すると5～6mmの拡大病斑となり（図2）、激発すると早期落葉する。また、果実にもカサブタ状の斑点が発生する。

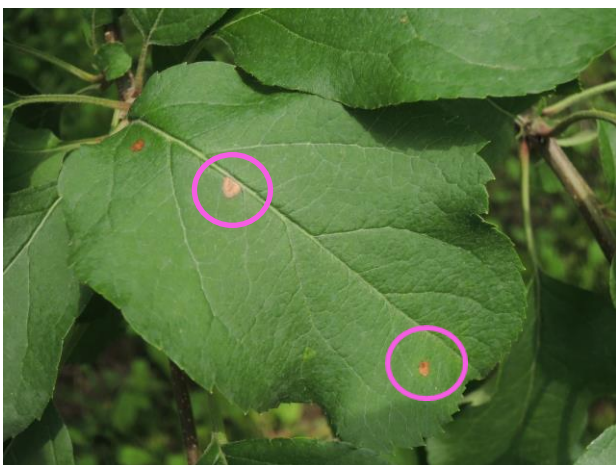


図1 初期病斑



図2 拡大病斑

2 防除対策

- (1) 落葉は園外に持ち出すか土中に埋めるなどして適切に処分する。
- (2) 樹形の改善により風通しを良くし、薬剤が樹全体にかかるようにする。
- (3) 銅(F:M1)、キャプタン(F:M4)などで計画的に予防を行い、発生が目立ってきたら治療効果の高いDMI殺菌剤(F:3)、QoI殺菌剤(F:11)などを散布する。
- (4) 薬剤耐性菌発生防止のため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する(表3)。

表3 リンゴ斑点落葉病に登録のある主な薬剤(令和5(2023)年6月7日現在)

農薬の名称	希釈 倍数	使用 方法	使用時期	本剤の 使用回数	有効成分	RAC コード
スコア顆粒水和剤	3000倍	散布	収穫14日前まで	3回以内	ジフェノコナ ゾール	F:3*
フルーツセイバー	1500～ 2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	ベンチオピラド	F:7
ナリアWDG	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	ピラクrostロビン ホスカリド	F:11 F:7
ファンタジスタ顆粒 水和剤	3000～ 4000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	ピリベンカルブ	F:11
ポリオキシシAL水和剤	1000倍	散布	収穫3日前まで	3回以内	ポリオキシシ	F:19
キノンドーフロアブル	800～1000倍	散布	収穫14日前まで	4回以内	有機銅	F:M1
ICボルドー412	20～50倍	散布	—	—	塩基性硫酸銅	F:M1
オーソサイド水和剤80	600～800倍	散布	収穫前日まで	6回以内	キャプタン	F:M4
ベルコートフロアブル	1000～ 1500倍	散布	収穫前日まで	6回以内 (但し、開 花期以降散 布は3回以 内)	イミノクタジ ンアルベシル 酸塩	F:M7

*F:3(DMI剤)は、薬剤耐性菌発生防止のため、年2回以内の使用とする。

詳細は、農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部ツイッター(@tochigi_nousei)」、
農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)
でもご覧になれます。

